

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

淫鬪遊戯

小説 黄支亮

挿絵 智狐

プロローグ

第一章 発端

第二章 過去

第三章 十二番目の

第四章 文香

エピローグ

006

011

071

143

194

228

登場人物紹介

Characters



ふじま たけみ
藤間 武美

能見流古武術の格闘少女。引き締まった身体を持つ中性的な美少女。

ゆうき えり
結城 恵理

久世流格闘術の使い手にして地下闘技場の運営委員の一人。

ふじま ふみか
藤間 文香

失踪した武美の姉。妹以上の能見流古武術の使い手。

かんの まゆみ
菅野 真弓

キックボクシングを使うポニーテイルの少女。

りすいれん
李翠蓮

小柄で華奢、あけっぴろげな性格の中国娘。

たちばな きょうこ
橘 京子

女相撲の選手のわりには眼鏡をかけた線の細い女の子。

「ギブアップは認められない。ロープもなし。凶器は基本的に禁止よ」

響は言った。凶器の禁止については含みを持たせてある。

「失禁は減点ポイント一。脱糞も減点ポイント一。頂点に達したと判断された時点で試合は終了。いいわね？」

いいも悪いもない。二人には邪悪なルールの下で闘わなければならない理由があるのだ。「ハンデクレジットは現在きっかり五百。負けたほうはオークションよ。いいわね？」

響は温かみのある声で言った。

「試合を開始するわよ」

武美と真弓は真剣な面持ちでうなずいた。一方は肉親の消息を知るために、一方は父親のジムを経済的困窮から救うためにどうしても闘わなければならないのだ。

「二人ともコーナーに戻って！」

東西のコーナーにはそれぞれに大会運営委員のスタッフであろう、十四、五歳の子供たちが三名と、白衣を着けた女性が立っていた。武美は彼らに迎え入れられる。三十ほどの眼鏡をかけた女性はどうかやら医師であるらしい。女医は白衣の下には何も着けておらず、白いパンプスだけ履いている。

「さあ、準備よ」

女医はすでに手に大型の注射器を抱えている。これから闘いを前にした神聖な儀式が始

まるのだ。

「……」

武美は何も始まっていないというのに苦しそうに顔を歪めた。

「そこ、握って」

眼鏡の女医は、武美に竹垣のコナーに両手をつくように指示を出した。コナーポストの役割を果たす太い青竹は苦しむ女たちの握った跡であらう、一部が黄色く変色している。少女は言われるままにコナーポストを握り締めた。

「おしり出して」

女医は言い、武美は僅かに躊躇った。

「お母さまはどんな状況になっても潔かったわよ」

女医の思いもよらぬ言葉に武美は振り返った。まわりの観客の歓声はすでに少女の耳に入っていない。

「いいからおしりを出しなさい」

女医は指示を出し、武美はしかたなく尻を突き出した。

「股開いて」

武美は言われるままに両足を開いた。そのときのこと。武美は自分の頭上、高いところに巨大な電光掲示板があることに気がついた。掲示板に映っているのは……。

「あ……」

武美が悲鳴を上げたときにはすべてが遅かった。女医の手が武美の袴の裾を無造作に持ち上げた。電光掲示板に巨大な尻の画像が映し出される。

「あっ、あっ……」

恐怖と恥辱の二重奏に武美は顔面を蒼白にする。言葉もまともに出てこない。電光掲示板に映し出されているのは間違いない、剥き出しになった武美の尻の割れ目であった。

ひくっひくっ……。

白い尻肉の中心、硬くすぼまった菊座。大写しになった少女の肛門に観客たちがどよめいた。

——見ろよ、あのケツの穴。

——ひくひくしているわ……。

——ケツ毛があんなに濃いぞ。

武美の頭上から屈辱的な言葉が降り注いでくる。少女の膝ががくがくと震える。

「こ、こんなの……」

狼狽してふらふらになっている武美に女医は言った。

「情けないわねー。藤間偲の娘でしょう、もっとしっかりなさい」

母親の名前に、青竹にすぎるようにつかまっている少女が尋ねた。

「母を、知っているのですか……」

「まあね……」

女医はそう言うと、武美の背後に回った。

「いい友達ってところかな。力を抜いて……」

少女の肛門に女医は指を伸ばした。

「綺麗な肛門ね。いいわ。お母さんとよく似ている」

眼鏡の医師はそう言うと、少女の肛門に何の断りもなく中指をずぶりと入れた。

「くああっ」

少女の口からみつももない叫びが漏れ、瞬間、両膝ががくりと内側に崩れる。女医は無慈悲に武美の尻の肉を揉みほぐす。

「力抜いて……」

女の指示に武美は青い竹の柱を抱きかかえるようにして応じる。尻の肉がほぐれたところに女医によるとどめの一撃が加えられた。

ずぶり……。

長さ三十センチほどもある巨大なプラスチック製の注射器の先端が武美の肛門に突き刺さった。ただちに女医の手によって透明な薬液が少女の直腸内に注ぎ込まれる。

「あうう、あう……」

青くなった少女の顔が今度は赤くなる。汗がたちまちにして噴き出し、演技をしているのではないかと思われるほどに膝ががくがくと痙攣する。

「我慢我慢……」

女医は武美の直腸内に情け容赦なく液体を注入する。受け入れる少女はただ耐えるより他になすべきことがない。やがて注射器のシリンダーを押す女医の手が止まった。透明なプラスチックの注射器の中には一滴の薬液も残っていない。すべてが武美の中に注入されたのだ。

「これでよし」

眼鏡の女医は爽やかに笑った。

「これで終わりよ……」

女医の言う終わりとはつまり彼女の仕事が終わったというだけであって、武美にとっては苦しみが始まったというそれだけのことであった。

「今度はこっち向いて」

無慈悲な女医の言葉に武美はゆるゆると青い竹から離れた。闘うところではない。ちょっとした尻の筋肉が緩めば腹部に収まった液体が音を立てて噴射しそうである。

「は、は、は……」

武美は肛門を必死に締めて天井を見上げた。少女の菊座からぼたぼたと薬液が垂れてく



る。

——どうして、どうして私はこんなことをしているんだろう。

少女はぼんやりとそんなことを考えていた。

——なぜ、こんなことをしなければならぬの？　なぜ、こんな破廉恥なことを我慢しなければいけないの？

武美は答えを見いだせない。

ぎゅる、ぎゅる……。

薬液の効果はあまりにも劇的であった。まだ注入されて一分もたっていないのに武美の下腹部で恐ろしいほどの律動があつた。音も凄まじい。

「う、うーん」

火照った顔で少女は鳴くと、天井から視線を落とした。リングの対角線、西側のコーナーにいる菅野真弓の姿が目に入った。きついレオタードの尻の部分をずらされたキックの娘の肛門に今まさに薬液が注がれようとしていた。

「う、うあう、あーっ！」

真弓は尻を突き出したまま泣いている。キックの少女のあられもない姿はカメラで撮影され、頭上の電光掲示板に映し出されていた。そして、今まさに、真弓の肛門から灌腸器のくちばしが抜き取られた。

にゅぽっ……。

注射器の口が抜き取られ、ぐっと締まる真弓の肛門のその瞬間が画面に映し出され、観客たちは大歓声を上げた。一方、父のジムを救うという決意を胸にリングに上がった少女のほうは戦意どころか理性まで失いかけている。

——なぜこんなところに。なぜこんなことをしてまで？

武美が腹部の緩い痛みをこらえながら考えていることを真弓もきつと考えているに違いない。そして、二人がその答えを見いだすよりも残酷な運命の園車が回るほうが遥かに早かった。

「失礼します！」

竹のコーナーに寄りかかって何とか身体を支えている武美に、まわりに控えていた少年少女たちが慌ただしく動き始める。彼らはその手に何かを持っていた。それが何であるか武美が気がついたときには、すべてが遅かった。運営委員会の雑務を行う子供たちは武美の上着の中に手を入れてくる。灌腸刑を受けた武美にはそれをかわすだけの余裕がない。少女の貧弱な乳房が剥き出しになった。

「うあ、や、やめ……」

武美にはその後の言葉が続かない。口を開くと同時に、肛門の力も抜けてしまいそうになったからである。無残にも今度は武美の乳房が電光掲示板に映し出され、観客たちの喝

采を浴びることになった。運営委員の子供たちは礼儀正しくかつ素早く武美の乳房に何かを取りつけた。鳥もちにくるまれたプラスチック製の何か。大きさは手のひらに乗るほどである。ドーナツを半分に割ったような扇形の凶器は武美の乳首のちょうど下にぴったりとはまる形になった。

「な、何を……」

抗議する武美に取り合わずに子供たちは今度は能見の娘が穿いている袴をめくり上げた。

「うあ、だめ、だめよ……」

尻の穴、乳房に続いて、剥き出しの股間。武美は必死に抵抗した。

——それだけは、そこだけは……。

普段の彼女であれば子供たちの悪戯など軽くいなすことができただろう。だが、激烈な効力を持つ薬液を直腸内に打ち込まれた今、彼女はコーナーに寄りかかって我が身を支えるのがやっとなのだ。ちよつとでも動けば肛門の筋肉が緩み、取り返しのつかない崩壊が起こってしまう。

「ああ……」

武美は泣いた。袴はついにまくられ、もつとも人に見られたくない、コンプレックスの固まりとなる股間が衆人の視線に晒されることになった。真っ黒な剛毛が密生した少女のもつとも恥ずかしい局所。もつとも汚れた、同時にもつとも神聖な局所。肉の割れ目が武

美の頭上に映し出された。

——見ろよ、見ろ、あれを！

——真っ黒だぜ！

観客の声が武美の胸に突き刺さる。少女のまなじりに涙が浮かぶ。と、そのときのことであつた。キックの少女の頭上にも同じように女の局所が映し出される。無残にも撮影された真弓の股間には武美とは反対に毛が一本もなかった。まったくの赤子のような有り様なのだ。

「くふうう……」

大観衆の怒号の中、武美は確かに真弓の切ないため息を聞いた。

——ごわごわのジャングル対つるつるのぱいぱんってわけだ。

観客の叫びが闘う少女たちの心を押しつぶす。否、実際には彼女たちが悲しみや屈辱を感じていられる時間は極めて短かった。繰り返しになるが彼女たちの運命は苛烈であり、感傷などというものを一切許さなかったのだ。

ねとっ……。

剥き出しになった二つの股間に、運営委員の補助をする子供たちが何かを張りつけた。ちようど割れ目の先端、左右の肉襷が重なり合うポイントにその何かがぴったりと密着するように。鳥もちでもって身体に張りつけられたそれが何であるか、武美にも真弓にも分

かっっていない。

「何なの、これ……」

武美は自分の股間ではなく、電光掲示板に映っている真弓の映像を見ながら呟いた。いったいあれは何だ。プラスチック製の十円玉ほどの大きさをしたそれと似たものを武美はどこかで見たことがあった。あれは……。

低周波のマッサージ機、そのように思った瞬間に、武美の身体に取りつけられたそれが機能し始めたのだ。

ヴウウウ……。

少女たちの頭に稲妻がぴかりと閃いた。武美は思わず内股のまま後ろに飛び上がり、右肩からコーナーに激突する。一方真弓のほうは、がに股のままブリッジをするように股間を天井に突き出して硬直する。

「うはああつ」

真弓が鳴いた。武美も呼応する。

「ああーっ！ あんあー！」

それは強烈な痺れであった。左右の乳首、そして股間に張りつけられた淫らな器具がびりびりと振動し始めたのである。それも、少女たちがちょうど心地よいと感じる周波数で。ヴウウ……。

マッサージ機は控えめな音を立てて、しかし着実に二人の闘士の粘膜を蝕んでいく。

「くっ、くはっ！」

股間に響く甘い囁き。武美はコーナーとなる竹に肩を押しつけ、両足のつま先で踏ん張る。かっと明るいライトが少女の目に入る。

——ああ、何、何なの……。

白い砂の上に武美の黒い影が張りついてぴくりとも動かない。大観衆の叫びが武美の頭の上から滝のように降り注ぐ。声が聞こえているのに、武美にはそれがどこか遠い国の言葉のように感ぜられた。

そして。

遠いざわめきの中で確かにゴングの音が鳴った。

「ファイッ！」

女レフェリーの鋭い叫びが武美の耳にも聞こえた。そして、その闘いのコールは武美の対戦相手にも聞こえたはずである。だが、二人の少女がゴングに弾かれたようにしてただちに肉弾戦に飛び出すという光景はついに見られなかった。

「う、くうう……」

歯を食いしばり武美はようやく上体を起こした。すでに藤間の娘の股間に卑劣な振動器具を取りつけた子供たちはリングの外に出て、試合の成り行きを見守っている。彼らは、

女闘士たちの股間に器具を取りつけることに始まり、女たちが漏らしてしまった汚物の清掃、汚れた女体の拭き取りなど細々とした仕事を受け持っている。女たちの闘いをリング脇で見守る目も真剣そのものである。少年少女が見つめる中、武美は深く息を吸った。呼吸を整え、相手を見える。闘いの相手となる菅野真弓も必死に自分を励まし、闘いに一歩を踏み出そうとしている。

——ま、負けるものか……。

古武術、キック両選手の顔に同時に悲壮な決意が浮かび、そして同時に絶望の色が二人の眉間に浮かんだ。

ぎゅる、ぎゅるる……。

真弓の下腹部が物凄い音を立てて鳴った。裸足のキックボクサーの膝がかくかくと笑う。闘う以前に真弓はグロッキーになっている。それは武美も同じであった。薬液が武美の直腸内部を荒々しく攪拌する。足袋を履いた一歩、すり足のその一歩が腹部に強烈なダメージを与える。それに加えてクリトリスと乳首にびったりと張りついて取れないマッサージ機。生き地獄という言葉が武美の頭に浮かんだ。

「うっ、うーん」

武美は悶絶しながら下腹部を押さえた。相手の加撃によるものではない。内臓の働きを抑えきれなくなったのだ。ショートヘアの武道家が苦しみながら必死に口をすぼめた菊座

の隙からは薬液が少しずつ染み出している。と、苦悩する武美のほうに真弓が襲ってきた。否、攻撃をするという明確な意思をキックの少女は持ち合わせていない。ただ、直腸のあまりの苦しみに、そしてパイプの振動の心地よさに打ちのめされ足がもつれたのだろう、砂の上でたたらを踏んだポニーテイルの美少女はまだ一発のパンチも一発のキックも打たず、また一発のジャブすらもらっていないのに武美にクリンチをしてきた。いや、クリンチというのも正確な表現から恐ろしくかけ離れている。キックの少女はただ、武美に抱きついてきたのだ。肉体を両足で支えることができなくなった。だから目の前にいた武美にもたれかかってきた。

「こ、こんなの……格闘でもなんでもない……」

真弓の悲痛な呟きが武美の耳に届く。

「こ、こんなの……こんなの認めない、こんな恥知らずな……」

キックの少女は泣いていた。そして彼女をさらに泣かせるような出来事が起こった。弱音を吐いた真弓を罰するようにしてキックの少女の左右の乳首とクリトリスに装着されたマッサージ機が回転数を早めたのだ。

ウンウンウン……。

キックの少女の目がかっと見開かれ、そして真弓ではなく抱きつかれている武美のほうに背中をかきむしられる痛みに叫びを上げた。

「あ、ちょ、ちょっと……」

武美の悲鳴はクリンチをしている真弓には伝わらない。突然に陰部を痛打されたキックの少女はもはや限界であったのだ。

「う、う、うああーっ」

菅野真弓は泣き叫んでいた。優れた身体能力とそれゆえの対戦成績。そのようなものは地下格闘技ではまったく無意味であった。

——見ろ、漏らずぞ漏らずぞ！

観客席の温度が大いに上がる。武美の視線の上には、幅が狭すぎて、ほとんど紐パンツのようになっていいるレオタードを食い込ませた真弓の尻の割れ目が映し出されている。キックの娘が限界なのは明らかであった。

「も、もうだめ、もう……」

真弓は涙を流し、涎を垂らし、白い砂を両足の指で固く握った。そして。

「あーっ！」

キックボクサーは哀切極まる叫びを上げた。レオタードの食い込んだ尻の割れ目で恐ろしいことが起こった。

ぶ……ぶしゅるるーっ。

まるで噴水であった。否、苛烈な花火というべきか。菅野真弓は直腸責めについに耐え

きれなくなってしまうのだ。よく締まった尻肉の中心から透明な薬液が狂ったように噴射される。

「あぁーっ」

ポニーテイルの少女は泣きながら、武美の道着を握り締める。激烈な呼び水に続いて、恐ろしい汚物が少女のレオタード脇から噴出する。

「う、うぉーっ」

キックボクサーは苦痛と快感にその身をずたずたにされ、狂ったように雄叫びを上げた。広がった菊座から流れ出た真弓の便がぶりぶりといくど砂の上に吐き出される。なんと汚れたと武美は対戦相手を軽蔑しなかった。彼女自身が他人のことを蔑めるような立場にはなかったからである。

ヴいいいいーっ。

武美は自分の身にどれほど無慈悲な一撃が見舞われたのか理解できていない。快不快を感じる前に、まるで電源が落ちてしまったかのように武美の身体が動かなくなったのだ。

——何が……。

何が起こったのかと考え、そこで武美は初めて自分のクリトリスに張りつけられたマッサージ機の振動に気がついたのだ。凶悪な一撃。悪魔のような痺れ。武美の身体はそれを無条件に気持ちいいと感じてしまっていた。

——だめ、だめだったら……。

頭で考えていることが言葉にも行動にもならない。甘美な責め苦に武美の下半身は痛撃される。その一瞬、何としても排便をこらえなければと肛門に気を取られたその一瞬。たった一瞬のミス。それは取り返しのない結果をもたらすことになってしまった。

「な……」

排便を続ける真弓に抱き締められるように立ち尽くす少女は、何が起こったのかまだ理解できていない。

ちよろろ。

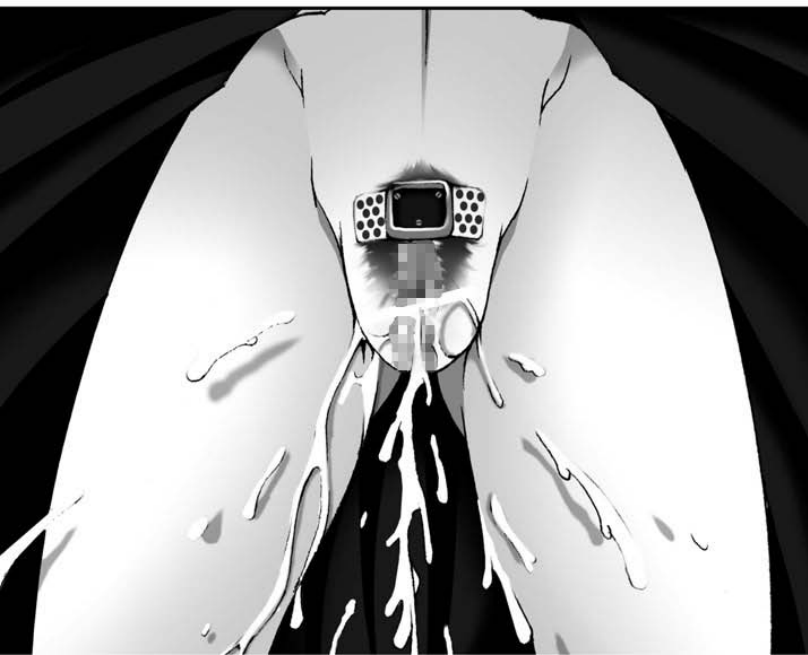
下半身の脱力。耳になじみのない肉の擦れる音。白い足袋を着けた武美の足元に誰かが水をこぼしたように水溜まりが広がっていく。袴の下の少女の脚ががくがくと笑う。

——あわわ、な、何……。

クリトリスと乳首を同時に責め立てられる武美は、自分に起こってしまった尿失禁という悲運を認識できない。ただ、突き上げるがごとき刺激に唇を半開きにして『あうあう』と喘ぐだけである。

「く、くふう……」

真弓が涎を垂らしたまま呻いた。武美の腰に両手を回し、尻を突き出しているキックの娘の肛門からはすでに汚れた物体の流出は止まっている。だが、股間のマッサージ機のほ



うは相変わらず動きを止めていない。

「く、苦しい、くはあ……」

武美の直腸内にはいまだに無慈悲な薬液と汚物が旋回している。

——大のほうは大のほうだけは……。

真っ青になった武美の身体がぐらぐらと揺れる。次の瞬間真弓に抱えられる藤間の娘の体が大きく崩れた。キックの娘もつられるようにしてよろめいた。

——汚物の上には倒れたくない。

無意識下に必死の思いがあつたのだろう。少女たちは、自分たちが作り出した泉からかなり離れたところまでもつれる足で頑張り、最後には白い砂の上に倒れ込んだ。

「あつ、あつ、あーっ」

真弓は白い砂の上に、まるで礼拝する回教徒のように四つんばいになって、尻を空中で回転させている。一方武美のほうはリングの上に膝をついて顔を両手で覆って鳴いている。

「うっ、うおおーっ」

格闘とはいえない。けれど、二人の少女たちは確かに闘っていたのだ。どんな相手よりも恐ろしい恥辱という名前の化け物と。そして、それこそは、恥知らずな観客たちがもっとも望むものであつた。

——いけーっ、いっちゃまえーっ！

第三章『十三番目の』より

「橘さんや翠蓮も？」

白髪の美女は笑った。裸の美女はとても母性的である。

——ああ、あの二人もここに来るのか。

武美は友人の名前が出たことで何となく安心したものである。シンディーに麗子、京子と翠蓮の四人が十二番キープで、宗一郎は、この四人を非常に気に入っていて常にそばに置いておくという。

「さ、これを持って……」

シンディー・ノートンは穏やかに言って武美に鞭を持たせた。とても理知的な眼差しをした美女は、乳房のところが股間のところ、水着を着けていた部分が綺麗に日焼けが抜けていて、浮き上がるようにして白くなっている。武美はちょうど、自分の目線に当たるシンディーの小さな三角形に切り取られた白い乳房の先端がちよつと気になった。ピンク色をした大きめの乳輪とぴきつと突っ立った乳首。ノートンは表面こそ穏やかだが、体内にはどろどろとたぎるマグマが蠢いているようである。

「さあ、それで我がままなお嬢様を打ち据えてあげなさい！」

武美は鞭を黙って見つめた。自分がなぜこんなことをしなければならぬのか。それが少女には分らず、ただ鞭を眺めるばかりである。七本に枝分かれをした革の鞭の効果が果たしていかほどであるのか武美には理解が及ばない。と、戸惑って一歩も踏み出せない

武美の耳元にシンディーは言った。

「大丈夫。これは麗子自身が望んだこと」

そうは言われても、武美には他人を打ちのめして喜ぶ趣味はない。困惑している武美の手を異国の女闘士の手が捕らえた。そして、そのまま少女の混乱を黙殺するように腕を振り上げる。細い革が空を切り、全裸の椎名麗子の乳房に命中した。

バチイイ！

革の鞭の音は武美が驚くほどに派手であつた。鞭打たれた高慢な美女の唇が笑つたように武美には思われた。

「ひいひい……」

目隠しをされた麗子は突然の打撃に我が身を震わせ、全身で充足感を表現する。股間の神聖な肉穴に無造作に突っ込まれた薔薇の花が喜びにゆらゆらと揺れた。

「……もつと、もつと鞭を、鞭を」

麗子は悶絶して言い、そして、武美は乞われるままにもう一度鞭を振るつた。今度はシンディーの補助もレクチャーもない。

ピシイイ。

武美は軽く鞭を振るつたつもりであるが、その音は驚くほど激しい。笞刑ちけいにあう椎名麗子は目隠しの下、頬を真っ赤に染めて恍惚としている。武美は、シンディーを見やり、そ

れから自分を買い受けた主人のほうを見つめた。二人とも笑っている。蔑むようないやらしい笑いではない。初めて自分の足で立ち、歩き始めた我が子に笑いかける両親の笑いであつた。もしも、何も知らないころの武美であれば、きつとこのような破廉恥な変態行為に露骨な嫌悪感を覚えていたはずである。それを望む女にも、強いる者たちにも手にした道具や重厚なX字架にもきつとひどい汚れを武美は感じたはずなのだ。だが、少女はすでに変わってしまった。破廉恥な闘いを二度にわたって行い、大股を広げて卑猥なオーグションにもかけられてしまった。そして、こともあろうに、武美はそれに発狂することもなく淫猥極まる自分の運命を受け入れてしまっている。

——母親を、姉を探さなければ。

そのような大前提は実は少女の中では言い訳でしかなかったのではないか。もともと、武美の内に秘めた劣悪な変態性を指弾するべきではなかっただろう。武美が闘技場で出会った人々は圧倒的に善良で好感の持てる人のほうが多かった。レフェリーの有村響もそうだし、菅野真弓や、橘京子、李翠蓮も、奇妙な人物であるが面白くてとても愉快な連中であるのだ。強いていうならば武美と同じ匂いを持っているとするべきか。最初は軽蔑していた卑猥な客たちの興奮も武美はすでになぜそうなるのかということを理解している。

——美しいから。

美しいものに心を動かされるのは当然ではないか。そして、美しい者だけが闘うことを

許されたリングで、闘う権利を与えられた者は本当に僅かしか存在しないのだ。武美はその僅かな一人である。

「さ、続けて」

シンディー・ノートンは囁くように言うと、武美が着けていたバスローブの腰ひもをほどいた。少女の着けていた薄い着衣の前がはだけ、乳房の谷間が、上を向いたへそが、そして少女が自慢とする真っ黒いデルタが顔を覗かせる。背の高い異国の女性は武美の肉体にまとりついている不粹な殻を外してくれる。少女は再び全裸となった。だが、武美はそのことを恥ずかしいとは思わなかった。その場にいるすべての人物が心の武装を解いたもつとも無防備な姿を晒していたからである。

「……慰めてあげてください」

十二番室の主が新米の牝奴隷に言った。武美は、全裸のまま足を踏ん張り、X字に手足を大きく広げた薔薇の麗人の肌を軽く叩いた。

びしり、びしり……。

「うう、あーっ！」

マゾの美女は心を震わせ、美酒に酔いしれるように泣いた。くぐられた全裸の美女の膣からあふれ出た透明なエキスが緑色をした薔薇の茎の上をつーつと流れていく。朝一番の朝露に濡れた薔薇花が燃え上がるようにして輝く。武美は椎名麗子の肌に軽く軽く鞭を当

てていく。武美はすでに理解している。股間に薔薇を生けられた美女が求めるのは激痛ではなく心地よい刺激であるということ。

手首を使って鞭を振る武美の姿を満足そうに見ながら、シンディーは主の横たわるベッドのほうへと近づき、そして若い主人の手を取った。

「さ、我が主……」

背の高いモデル体形の美女は若者を立ち上がらせる。そして、そのまま二人揃って鞭を振るう武美のほうへと歩いてくる。

ぴしーっ、ぴしーっ……

鞭を振るう武美の顔に紅がさし始める。女の肌を軽く鞭打つたびに武美の心を覆う何かと一緒に弾けて散っていくようであった。

「もっとな……ひーっ！ もっとな鞭で、この傲慢な私をつ、あつ！ 傲慢な椎名麗子をつ、徹底的に懲りものに、懲りものにつ、かはーっ！」

全身に鞭を受けて素っ裸の椎名麗子は四肢の筋肉を引きつらせて悶える。

——楽しい……

武美は自分の下腹部で勢いが衰えながらも確かに種火のように燃えとどまっていた恥知らずな牝の火が再び燃え上がるのに気がついていない。少女の肉の変化に気がついてるのは、武美の背後から近づくシンディー・ノートンであった。裸の美女への鞭打ちに無条

件に没頭する武美の腕に背の高い外国人女性の手が触れた。インド武術の女は見事に入団テストを好成績でクリアした武美の手から鞭を取り上げると、少女に言った。

「さ、そこに立って……」

シンディーは武美に囚人の載っていないもう一台のX字架を指さした。木かあるいはプラスチックの骨組みにウレタンを張り合わせ、その上を黒い人造皮で覆った奇妙な機材を武美は不思議そうに眺めた。何人もの女たちがくくりつけられ、責め廻された死刑台。裸の少女には僅かだが躊躇いがあった。

——ここに磔にされたら、すぐに……。

武美はすぐ後ろに立っている若者の股間を気にしている。宗一郎という人物の股間に生えた武美が持ちえない器官は新たな獲物を貫き通すべく硬くそり立っている。長さ十センチ少々。太さは……。武美は父親がいなかったために、その部分をこれまでにまじまじと眺めたことがなかったのだ。恐ろしくもあり不気味でもある。その不気味なものがいずれ武美の股間中心に突き刺さることになる——。

「大丈夫よ……」

シンディー・ノートンが自分の胸と腹を武美の背中にぴったりとくっつけるようにして少女に一步を踏み出させる。

「あなたのお友達も、そして私も、ここで初めての洗礼を受けた。心配はないわ」

武美は白い髪の美女を振り返った。手足の長い美女は穏やかに笑うと、少女の背中を優しく押した。以前の武美であれば、きっとこのような状況にあれば反撃を試みるか、逃げ出していたはずである。だが彼女はそうはしなかった。子宮の中に無理やりに灯された白い炎がうぶな娘の身体を内側からじりじりと焙るように責め立てる。もしもという仮定は無意味であったが、武美がもっとと男性経験に優れていて、何度も修羅場をくぐってきたちんぴら女であったならば、もっと違う展開があったのかもしれない。けれど、まっすぐで前向き、不器用なところのある少女はどうしても進むことを選んでしまう。

裸の外国人女性に押し出されるようにして一步を踏み出した武美は、二歩目からは自分の意思で礫台に向かった。黒光りする礫台には革のベルトがところどころに見られる。

「こちらを向いて」

シンディーは武美に振り返るように言った。少女はゆっくりと先輩の女囚と主人のほうを見やった。

「手を上げて」

シンディーではなく、若い主人が武美に指示を出した。少女はひどく冷静に若い堂島の跡取りの横顔を眺めている。穏やかで実に優しく、誠実そうな人物である。どちらかというとがちりしていて大柄、力強い男性が好みの武美にとっては、宗一郎という男性はあまりにもひ弱で貧弱に見える。それでは、どうしてもこの青二才が我慢ならないのかとい

うと、これが困ったことにそういうわけでもないのだ。

——弟みたいな子。

武美は優秀な姉がいたせいで、自分では意識していないし、外見的にも澁刺としているが、心のどこかで萎縮したような部分がある。弱々しい若者の印象は実は、武美の心が抱えているアニマという存在に極めて近いものではなかったか。

「手を上げて……」

若者はおつとりと言った。少女は言われるままに万歳をするようにして両手を上に上げた。それほど豊かでもない乳房がまるで強調されるようにして突き出される。武美の気がつかないうちに少女の乳首はすでに硬く勃起している。若者は背伸びをして武美の左手首を、シンディー・ノートンは少女の右手首を礫台に固定する。少女の心臓が恐ろしい勢いで動悸を打つ。

——恐ろしくない。どうしてだか分からないけれど、すごく興奮する。

武美はぼんやりとそんなことを思った。堂島の老人は、この闘技自体が実に古い歴史を持つていると言っていた。武美の肢体にはその歴史がそのまま血流として流れている。彼女の姉にも、母親にもそれは同じであつただろう。

「よし、これでいい」

頬を染めている武美に若者は言った。次は、両足首である。武美は両膝を四五度の角度

にばかりと開いた。シンディーの手のひらによる誘導はあったが、ほとんどが少女自身による意思であつた。ただちに足首にベルトが巻かれる。美しい一個のオブジェが完全に完

成する。

「綺麗だわ……」
シンディーは酔いしれて言った。女が言う通りであつた。黒い磔台に手足を大きく開いて固定された武美の肌は輝くほどに美しい。磔台の黒、肉体の白、乳首のピンク、そして覆う石炭色のデルタ。

目隠しをされて手足を大きく広げて拘束される麗子と同じように素っ裸のまま磔にされた武美。まるで神聖な絵画のような一对の女体を前に、白髪の新ディーも、彼女の主人も目を細める。と、白髪の美女が不意に手にしていた鞭を振り上げ、それを武美の白い肌に振り下ろした。

ピシッ……。

先の分かれた鞭が無防備な少女の肉体を打ち据える。激痛というほどのものではない、小さく刺すような刺激が少女の肌にあつた。

「ひっ！」

叫び声を必死に押し殺す武美を次々に鞭が襲う。主人である堂島の曾孫は壁にかかっていた蠅叩き状の責め具を取り上げると、それでもう一人の女囚、椎名麗子の肉体をぴしぴ

しと弾き始める。

「ああ、もつと嬲りものに、嬲りものに……」

むごい打撃に麗子の笑った唇がわなわなと痺れている。鞭も蠅叩きも素材が柔らかく、女体に僅かに赤い跡を残すだけで、ミミズ腫れを刻むことすらできないほどに威力の弱いものである。麗子は痛みにではなく虐げられることしいたに酔っているのだ。その激しい陶醉はやがて隣にいる武美にも空気を伝わって感染する。

ひゅっ、ひゅっ……。

蠅叩きが空を切り、ぴしりぴしりと麗子の肌を打ちのめす。

「くはーっ！ くふーっ！」

美女は快楽に酩酊している。武美にも白髪の外国人女性による責めが加えられる。

ピシャッ！ ピシャッ！

「うーっ、あーっ！」

X字に一糸まとわぬ姿で吊るされて乳房を、へその上を、腿を鞭打たれる。あまりにも哀しく惨めな仕打ちに、しかし武美の肉体は少しずつ慣れていく。

「ああーっ！ やめてーっ！」

武美は拷問が止まないことを知りながら絶叫した。

「だめよ、まだまだ……」



白髪のシンディー・ノートンは笑ってさらに鞭打ちを続ける。

びしっ……。武美の豊かとはいえない右の乳房のちょうど乳首の上に鞭が当たる。

「うあーっ！」

少女は固く目を閉ざし、眉を不細工に寄せて泣くような顔を作った。さらに乳房に鞭が直撃する。二度、三度……。小さな鋭い刺激が電流のようにして武美の肉体を駆け抜けていく。

びしっ！

「ああーっ、痛いーっ」

武美は涙を流して絶叫する。痛打がもう一度。

「やめてーっ！ あんあーっ！」

少女の心を覆う他人と自分を分け隔てる鉄の鎧が鞭の一振りごとに碎かれ、純粋な魂が少しずつ剥き出しになっていく。

「そろそろ……いいでしょう？」

シンディー・ノートンが鞭を下ろしたのは、二十数回の刑が執行されたあとのことであつた。

「はあ、はあ、はあ……」

武美は息も絶え絶えになっている。それは先に拷問が始まっている椎名麗子も同じであ

る。

「さあ、本番よ……」

白髪の美女はそう言うのと、武美の手足の縛めを外しにかかる。いい具合に肉のほぐれた少女の肢体はまさに貫きごろとなっていたのである。

「我が君」

シンディーに乞われて主人である堂島の少年も一緒になって拘束された武美を助け出す。自らの手で縛りつけ、いじめ抜き、助け出す。奇妙な無駄である。だが遊戯とは無駄であり合理性に欠けるものであるのだ。そう、これは最高に興奮する彼らの遊戯であつたのだ。

「さ、こつちよ……」

鞭責めをもらつた武美はすでに肉がほぐれてしまつて自力で歩くことができない。白髪の美女に支えられて少女はようやくベッドに横になることができた。先ほどまで部屋の主である堂島の若者が寝ていたベッドにはやんわりとした人肌の温もりが残っており、それが鞭を受けて火照つた武美の肢体には心地よかつた。

「さあ、麗子も解放してあげるよ……」

青年はそう言つてもう一人の女囚の股間からしつとりと濡れた薔薇の花束を抜き取り、それから手足の拘束を解いてやつた。恩赦に浴した裸の美女も、ほとんど人事不省の一步手前になっており、信頼する主人の肩に寄りかかつてベッドまで辿り着いた。

主人となる堂島の若者とシンディー・ノートン、拷問で足元のおぼつかない椎名麗子、それから藤間武美。数人が一時に横になり乱交を楽しむために作られた特注のベッドの上には四人の闘士が上がるようになった。

ルールなし、凶器使用可のデスマッチ――。

最初に狙われたのは当たり前だが、前後不覚に陥る武美であった。全裸のままうつぶせに伸びている少女の背後からシンディーが忍び寄り、そして抱きかかえた。武美は全身の筋肉が心地よく緩んでしまい、逃れる術がない。否、少女には逃げようという意味も最初からなかった。

「さあ、我がご主人様に一番綺麗なところを見せてさしあげて……」

手足の長い美女はあぐらをかくようにして座り、長い足の間に武美を挟み込むようにして少女を座らせる。

「あう、あう……」

力が抜けた武美はなすがままである。シンディーは武美の背後から少女が無意識に閉じてしまった腿の隙間に手を回し、神聖な花園を主人である堂島が賞で楽しめるようにこれをこじ開けた。体がほぐれた武美は力が入らない。白い太腿がすーっと左右に開いていく。

「綺麗なあそこを見てもらいましょう」

シンディーは武美の耳元に囁いた。武美はただ、

「うう……」

と、寝言のような喘ぎを漏らただけである。堂島の若者は仰向けに倒れる薔薇の麗人の身体の上をまたぐようにして武美のほうに近づいてくる。

——ああ、あそこを見られている……。

意識朦朧となりながら武美は確かにそのように感じ、恥じらっていた。リングの上で味わう恥ずかしさとは異質な、より肉感的な恥じらいとでもいうべきか。リングの上での恥辱は基本的に女性相手のそれである。敵も女性、レフェリーもジャッジも女性。多くの人々に恥態を見られることはあっても、観客のペニスによって闘士の燃えたぎった陰部が刺し貫かれるということはない。観客の声援や罵声はもらったとしても、彼らの鼻息が股間の敏感な肉のびらびらに当たり、そのことで少女が興奮し、激烈に催すということもない。だが、ベッドの上では違う。客であるはずの男性は股間の凶器を硬く尖らせ、いつでも女闘士にとどめを刺す態勢となっているのだ。

「……大丈夫よ、リラックスして。体のすべてを預けて。必ず気持ちよくしてあげるから……」

白髪のシンディーが武美の耳元に甘く囁いた。少女はなぜかシンディーの囁きに母親の声をだぶらせている。

——お母さんも、今、どこかで私みたいに誰かの腕に……。

母だけではない。姉の文香もいずこかで、男の下に組み敷かれて喜悅のため息を漏らしているのだろうか？ 藤間の血。自分でも知らなかった熱い血潮。

壁にかけられたテレビ画面ではチャイナドレスをはぎ取られた李翠蓮の股間に、相手選手の指がずぼずぼと出入りしている。泣き叫ぶ中国娘は陥落寸前のように泣き喚いている。そして、液晶モニターのこちら側でも、もう一人の少女の肉の城が陥落しようとしていた。「ああーう……」

全身の力を抜いてシンディー・ノートンに背中を預けていた武美の口から、生まれて初めての甘えるような女の吐息が漏れた。白い髪をした手足の長い美女の両手が武美の膨らみに欠ける左右の乳房をゆつくりとマッサージし始めたのだ。細く長い外国人女性の指が武美の乳房を下側から持ち上げるようにして擦り、外側から寄せるようにして圧迫し、左右の人さし指を器用に使って二粒の乳首をころころと転がす。上手な刺激をもらって武美は鼻を鳴らした。

——おっぱいを揉まれることがこんなに気持ちいいなんて……。

鞭打ちのあとの優しい刺激。緩急のついた責めにうぶな少女はただ翻弄されるばかりである。白髪のシンディーにとっても、これほど責めさいなむのに面白い相手はいなかっただろう。真っさらで誰の色にも染まっていないキャンバス。これを牡の白と牝の白で綺麗に彩っていくのだ。



「さあ、大事なところを見せてあげて……」

外国人女性の指が武美の股間にするすると下りていく。

——そこは、そこは……。

大観衆に見せつけた柔らかい局所。結城恵理によってついばまれ、ついにははしたなくも汁にまみれてしまった我慢のきかない肉の花。黒光りする石炭色の陰毛の森に隠れた局所をシンデリーの指が軽く触れた。最初の一撃、ファーストストライクを武美は酸っぱいものでも噛み締めるように唇を突き出してこらえた。

じやりじやり……。

小麦色の肌が美しい美女の指が武美の股間を綺麗な正円を描くようにして踊る。時計回りに、時計回りに、時計回りに。ときに緩く、ときに素早く、少女の弱い部分を守る鎮守の森の中心には常に美女の中指の第二関節の部分がフィットしている。

「さあ、恥ずかしがることはないのよ。十分に楽しんで女になって。そうすれば真の闘士になれる……」

背後からシンデリーの唇が囁く。左の乳房を揉みしだかれ、股間の敏感な局部を丁寧に刺激される。二度に及ぶリングでの闘い、全裸オークション、さらには自ら進んで受けてしまった鞭打ち刑と、武美の肉体にはそのような恥知らずな行為を受け入れるだけの土壌がすでに醸成されていたのだ。

「ああ、うう……」

シンディーの愛に満ちた文字通りの愛撫に武美は自分の下半身が蕩け出していくのを確かに感じていた。

「気持ちいいでしょう……」

白髪の美女は少女に問うた。年の割に青い少女は抗うように口を閉ざした。強情な新米をしかし大人の美女は責めたりはしなかった。思わず口にしてしまう快感もあれば、口に出せない、言葉にできない快感というものもある。それを確かめるようにシンディーの指の動きが武美の割れ目の一点に収束し始める。

「あ、あ、あ！」

少女の唇から悲痛極まる嗚咽が漏れる。漏れたのは嗚咽だけではない。武美は喘いだ拍子に思わず涎を垂らしてしまった。

「感じているね……」

武美の目の前に横たわる若者が慈しむように裸の少女を眺めている。堂島は自らの硬いペニスを椎名麗子の唇に預けている。人事不省から立ち直った麗子は、まるで美味極まる果実をしゃぶるようにして若者のペニスを味わっている。白い肌の美しい薔薇の麗人は左の足をベッドの上にとぴんと伸ばし、右足を僅かに曲げて股間に隙間を作っている。その隙間に若者の手が入り、麗子の柔らかく敏感な大輪の肉花を指で刺激している。

ぬちよぬちよぬちよ……。

麗子の股間で堂島宗一郎の人さし指と中指が激しく旋回、ピストン運動をしている。薔薇の美女はあまりに激的な刺激に耐えかねて、何度も若者のペニスへの奉仕を中座し、牝犬のように絶叫する。

「ああーっ、だめ、そこは、そこを擦らないでええ」

麗子の懇願を若者は黙殺し、湿りきった柔らかいアワビの中を指で徹底的にかき回している。

「……穴の中をさせるようになれば、リングでの戦術も増えるのよ」

シンディーは後輩にレクチャーをしてくれたが、武美のほうはそんなことをほとんど聞いていない。聞こえていないのだ。

——ああ、あそこが、何て、何て……。

気持ちいいと絶叫したい武美がいて、それだけはだめだと必死に抑える武美がいる。相反する気持ちに左右から引っ張られ少女の心は引き裂かれる一歩手前である。

「それぞれ、クリトリス、感じるでしょう……」

シンディーの指先は容赦がない。陰核、陰核、ただ陰核だけがはじめ抜かれる。揉まれ、擦られ、つつかれ、指の腹を使った無慈悲極まるバイブレーションが送られる。徹底的であまりにも心地よい下半身へのマッサージに、少女はまるでビーチボールを膨らませる子

供のような真っ赤な顔を作っている。ただ耐えているだけなのに少女の体温が上がり、汗が染み出してくる。体の筋肉に変な具合に力が入り、吐息が甘く荒くなる。

「くっ、くっ、くはあああっ」

歯を食いしばり、食いしばり、耐えに耐えていた武美の口から泣き叫ぶような絶叫が漏れた。

——きっ、気持ち……気持ち……。

少女の下唇は度重なる拷問によってすでにだらしなく半開きとなっている。そして、緩みきった牝貝の中心からは透明なねとーっとねばつく女蜜が噴出し、武美の陰毛の森を、肉アワビをてらてらと光らせていた。

視線がうつろになっている武美の目の前で、堂島の少年が動いた。少年はペニスを麗子に預けたまま、ゆっくりと武美のほうに這い寄ってくる。そして、涙を流し、涎を口の端から垂らしたままの武美の唇に自分の唇を押し当てた。

——この奴隷は未来永劫自分のもの。

少年はそのような刻印を武美の唇に押したのだ。不思議なことに武美には、そのような強引で無残な運命の一撃に恐怖することもなければ焦燥を感じたりすることもなかった。奇妙な一体感、熱く燃え上がっているのに、穏やかで満たされた充足感が少女にはあった。堂島の老人によれば、藤間家は地下闘技に深く関わってきたのだという。武美はそのこと

を知らなかったが、彼女の血はそれを知っていたのだ。目の前にいる若者の先祖の中には、あるいは武美の先祖と淫らに交わった者があつたのだらう。遣伝子の中に閉じ込められていた本人の知らない遠い記憶。その記憶があるいは武美の充足感につながったのではないか。

ぬちゃ、くちゃ、ちうう……。

若者の唇が武美のことをうまくリードする。少女は小鳥が親鳥に餌をねだるようにして若者の口を吸う。男の舌が武美の舌をノックし、少女の舌もそれに応える。唇と舌がもつれ合い、絡み合い熱い思いが唾液とともに交換される。

「ああ……」

若者の唇が武美の唇から離れていく。混じり合った唾液が蜘蛛の糸のように綺麗な銀糸となり、放物線を作り、やがてふつと切れた。白い肌を紅潮させた少女はまだまだ吸い足りぬといった具合にすぎるような視線を若者に送ったが、青年はそれには応じてくれない。若者はその代わりに、自分の奴隷を武美の唇にあてがった。大事なアワビの部分に入さし指と中指を入れられ、ずぼずぼと刺激される椎名麗子はほとんど堂島の少年の指人形と化している。

「ああーっ！ あーっ！」

快感のあまり両のまなじりから涙を流して号泣する椎名麗子は、主人の指の指示を受け

て、武美にもたれかかるように抱きついてくる。赤い薔薇色の唇と幼い唇が重なり合う。

「さあ、あいさつをして……」

シンディー・ノートンは武美の耳の裏を優しく舐めて、少女が没頭するように促した。股間の一点への激烈な快感と耳の裏への悪寒がするほどの刺激、乳房を揉まれる喜びに加えて敏感で感じやすい唇への愛撫。少女の魂はほとんど粉碎されようとしていた。

「んん、んん、んんーっ」

武美は今やあさましい一匹の牝であった。獣性に支配された畜生。快感を抑えきれない肉の固まり。性欲を楽しみ、相手を楽しませるだけの女というマシン。武美は自分がそのような存在に成り果ててしまったことを後悔していない。もとより、武道というものは獣の道であるのだ。武道をたしなむ武美と性欲を楽しむ武美は最初から極めて似通っていたのだ。性の懊悩やその喜びも、被虐の快感は修練そのもの――。

「気持ちいいでしょう、気持ちよくない？」

シンディーの指が武美のクリトリスを入念に揉みほぐす。少女の陰核は揉めば揉むほどにしこつていく。

「あはーっ！ はーっ！」

武美の唇から椎名麗子の唇が離れて、栓を失った少女の口から鮮烈な叫びが漏れた。指人形麗子は武美のノーガードとなっている乳房を舌で舐め始める。

「そろそろ、穴の中をほじってほしい？」

シンディーが尋ねた。二人の女に前後を挟まれ徹底的に嬲りものにされる武美には答えるだけの余力すらない。

「くっ、くはっ。はっ！」

素晴らしい快感に武美の意識はずたずたになっている。意思も思考も理性もすべてがどこかに消し飛んでいる。あるのは快感への猛烈な欲求だけ。

「気持ちいいと認めたら、もっといいことをみんなですてあげる」

シンディーは悪魔の囁きを武美の耳の裏で囁く。白髪的美女と堂島宗一郎は視線を絡み合わせて楽しそうに笑っている。意地の悪い笑顔ではない。自分たちの子供を弄うような風情である。

「ああ……」

武美は顔を苦痛に歪ませて首を横に激しく振った。少女の白い額には玉のような汗が光り、股間からはだらだらと牝蜜が垂れ流れている。武美は肢体を奇妙な角度で突っ張らせる。

「気持ちいい？」

「あうう」

武美は号泣するように唇を震わせた。椎名麗子の唇が母の乳を吸う乳飲み子のように武

美の乳首を無心で吸っている。

「気持ちいい？」

「……は、はい」

少女はついに認めてしまった。自分がどのような存在であるかをついに自ら認め、口にしてしまったのだ。

「どこが気持ちいいの？」

シンディーは尋ねた。十二番の部屋に入ることを許された女たちへの通過儀礼である。

「どこ？」

武美はまるで真空状態で語るように口をばくばくとさせた。言葉は出てこない。白髪の美女は娘を誘い、導くように言った。

「ここはクリトリスというのよ」

シンディーの指が武美の陰核をぎゅぎゅつとつまんだ。少女は快楽の前にべろべろに酔っ払っている。

「ここはマ〇コ。マ〇コが気持ちいいでしょう」

武美はシンディーの問いかけに、小鼻をひくつかせた。そして、次の瞬間、武美は一步を踏み出すようにして恥知らずな禁忌語を口にしていった。

「マ、マ〇コ……」

屈服した少女の口が笑うようにして引きつっている。シンデイーは慈母のように武美を背後から固く抱いた。

「マ○コ……」

自ら殻を内側から破った少女は淫猥な言葉を囁み締めるようにして呟いた。そして、儀礼を通り抜けた少女には、次の関門が待っていた。白髪の美女はうなずき、堂島の少年もそれに応える。ついに武美の肢体に神聖な肉の刻印が刻まれる瞬間がやってきたのだ。

「さ、横になって……」

シンデイー・ノートンはそう言うのと、武美を大きなベッドの真ん中に横たわらせた。そして自分は少女の左の脇に尻を突き出すようにして四つんばいになった。モデルと見まごう外国人女性には武美の左の乳房を揉み、先端を唇でちゅうちゅうと美味しそうに吸う。椎名麗子も弁えたもので尻の穴を天上に突き上げるようにして四つんばいになってこちらは武美の右の乳房を責め立てる。つるつるに剃り上げられたシンデイーの局所とV字にカットされた麗子の局所。ひざまずくようにして尻を突き出す二人のあさましい牝犬の恥部に堂島の指がするするっと入り込み、ゆっくりと、しつかりとしたバイブレーションを女たちに見舞う。

「うああーっ」

陰部をほじられて麗子が泣いた。

「くうーん」

柔らかく湿潤な割れ目の中をいじめられてシンディーも身悶えする。白髪の美女の局所はその身長に比べて意外なほど小さく、可憐であった。外国人のペニスではおそらくこの狭い穴に収まりきらないのではないかと。まるで小さなモンシロチョウのごとき白髪の美女の中を若者の指が無慈悲に丹念にかきむしる。シンディー・ノートンはまるで大風に吹き飛ばされるのをこらえるように武美の乳首に吸いついている。ただ吸いついているだけではない。美女は自分の肉体を無慈悲に責め立てる若者のために、いけにえとなる武美の割れ目を指で押し開いている。一方、椎名麗子も尿道裏に潜む快感ポイントを若者に擦られ、陰核を親指でぐりぐりと揉まれ、ほとんどグロッキーになりながらも必死になつて空になつて一方の手のひらで青年のペニスを支え、武美の中央へと誘導する。

「ううーん」

「くうう」

敏感なGスポットをほじられ痛烈な快感をもらったせいでシンディーと麗子が揃つて牝の吐息を漏らした。若者は二人の股間を左右の手を使ってじつくりと責め立てながら、麗子の誘導に従い、シンディーの長い指が大きく左右に押し広げる武美の柔らかい処女肉にペニスの先端を押しつけた。

ぴと……。

肉鉗と肉の割れ目が触れ合った最初の瞬間、武美は確かにその触れ合う音を聞いていた。

——あれが入ってくる、あれが……。

赤黒く膨れ上がった若者のペニス。血が集まり怒張しきつた若い衝角^{しょうかく}。武美は自分が持たないその器官を恐ろしいとは思わなかった。最初の痛みに対する恐怖もそれほど感じていない。少女の中にあるのは奇妙な高揚感と期待感だけであつた。

「よし……」

若者はそう言う、もう一度慎重に武美の膣肉と自分のペニスの具合を確かめる。濡れ具合は、角度は、位置は。主人の動きに合わせて二人の補助も微調整をする。シンディは武美の割れ目を展開して筋肉が折りたたまれたイソギンチャク状の入り口を綺麗に露出させ、その上で少女のクリトリスを手のひらで揉み続ける。麗子はシンディが剥き出した武美のアワビの中心に突き棒の位置と角度がびつたりになるようにする。

貫く宗一郎、烙印を押される武美、祝福するシンディと麗子。四人の意思が一点、散華の一点に集中する。四人の息がびたりと重なり、ついにその瞬間がやってきた。

ぐ、ぐぐぐーっ……。

若者の腰が前へ前へ進む。掘り進む角度、濡れ具合、牝の側の太さと牝の側の広さが重なり合う。シンディの指に押し広げられた武美の局部に宗一郎のペニスの先端がゆつくりゆつくりと沈み込んでいく。武美は上下の膣をがっちりと噛んで鈍痛に備える。一方貫

く若者は左右の指で器用に二人のしもべのアワビを内側から責め立てながら、腰に力を入れていく。

「ち、力を抜いて、力を……」

自身も秘肉をほじられて、シンディーは苦悶の表情を浮かべている。快楽に耐え、新米を必死に導く。

「あ、あ、あ……」

武美は何かに問いかけるように首をかしげている。自分は何をされているのか、これは痛いのか？ 閉ざされていた肉の通路が少しずつこじ開けられるが、武美にはまだ痛みが分からない。濡れに濡れた少女の膣道は滑りがよく、青年のペニスを軽々と飲み込んでいく……かに見えたそのときのこと。武美は菌を剥き出しにし、眉間に深い皺を刻んだ。汗でてかてか光る綺麗な白い肌がぴーんと張り詰める。裸足のつま先が固く握られ、ぷるぷるとシーツの上で痺れている。

痛みがあった。鈍い痛みである。少女は何かを叫ぼうとしたが、声が痛みで出てこない。そして、彼女が拒否も拒絶も、抗議もできない間に若者のペニスはその竿の中ほどまでが武美の中心に打ち込まれてしまっていた。

ぐり、ぐり……。

若者は無慈悲に淫らな烙印を武美の股間に押した。少女の膣肉は果敢にも一瞬だけ、不

埒な闖入者を押し出そうとしたが、一点突破の強力な破城槌の前には小さな膜はあまりにも無力であった。

ずぼっ……。

抵抗空しく武美の割れ目には、若く勢いのあるペニスが睨丸を収めた肉の小袋のところまですっぽりと埋め込まれてしまう。

「う、う、うあはああ」

痛みに耐えかねて、武美は泣き叫んだ。かつと目を見開き、涎を垂れ流し……。ただ不思議なことに少女の肉体そのものはびくりとも動かなかった。痛みがあれば普通、人の体はそれから逃れるような行動を無意識にとるものである。だが、武美の肉体は動かない。まるで股間にずぼっと突き立てられた熱い火箸を絶対に離さないようにして、少女の全身の筋肉が硬くなっている。と、膣肉奥深くまで差し込まれた若者のペニスと、穴の中に巻き込まれたようになってい肉襞の隙間から赤い鮮血がたらーっと垂れてくる。武美の処女が散らされた瞬間であった。

「いっ、痛い……」

武美は下半身を襲う鈍痛に耐えて呻いた。二人の女奴隷たちが武美に語る。

「頑張るのよ……」

シンディーが励ます。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>